

エッセイ集

伝える

法政大学経済学部

佐藤ゼミ

2007年10月

■伝える気持ち■

私はラグビーサークルに所属しており、現在公式戦の真只中です。このサークルでは一般的なサークル等とは異なり、4年生が各責任職に就いています。私は1年生時よりサークルに所属しているため、今年で先輩方とは3年目の付き合いになります。後輩というものはやんちゃなもので、決まって先輩に迷惑をかけるものです。もちろん私もそのなかの一人です。いつも多大な迷惑をかけているのに怒るところか逆に元気があって良いと常に暖かい目で見守ってくれます。私は本当に良い人たちに巡り会えたと感謝すると同時にやさしい言葉に甘えて様々な無茶をしたりしてきました。しかし、人間、歳をとればそれなりに責任というものは増してくるもので、こんな私にもたくさんの後輩ができ、「後輩」という存在でいられるのもあと1年をきるころまでできてしまいました。そして現在、その最後の1年の公式戦がとうとう始まってしまったのです。

我々のチームは現在学生リーグの2部に在籍しており、今年目標は2部で優勝し1部へとあがることです。先輩方は優しい「先輩」であると同時に、共通目標を持ち、共に切磋琢磨してきた同志でもあるのです。試合に勝った喜びも負けたときの悔しさも共に分かち合ってきました。今、そんな同志でもある先輩方は学生生活、いや人生最後かもしれない公式戦を迎えています。4年間のサークル活動におけるクライマックスを迎えているのです。私はチームメイトとして、そして一人の後輩として先輩方に今までの感謝を込めて花を添えてあげたい気持ちで一杯です。今までたくさん面倒をみてもらい、可愛がってもらい、そして成長させてもらいました。本当に見習うべき点の多いすばらしい人達です。言葉で気持ちを伝えるにはあまりにも言葉が足りません。この言葉に出来ない大きすぎる感謝の意を私は体を張って行動によって伝えたいと思います。そして、この何ともいえない暖かな気持ちをこれから続く後輩たちに伝えるためにも頑張ろうと思います。

■伝えることの大切さ■

私は今年の夏休みの経験を通じて、まさに「伝えることの大切さ」を大いに痛感したのである。その経験とは、インターンシップの仕事である。どのような会社かという、USENの放送を収録する制作会社だった。ところが、その会社には同じオフィスを間借りして、NPO「昭和の記憶」という世代を超えて記憶を伝えていこうという、ボランティア業務もやっていた。そのふたつの仕事を同時に行うわけだが、ここから大きく分けてふたつの大切さを得ることができた。まずひとつは、仕事の技術的なことである。たとえば、接客、交渉、取材、収録現場におけるものである。接客をする際には相手をもてなし、会話をし、気持ちを伝える。交渉では、相手を徹底的に調査しこちらの意向をいかに伝えるかが問われる。取材では、相手に聞きたいことの意味が伝わるよう、インタビューをする。ここにあげたことはすべて、いい聞き手かどうかでどれだけのことが伝わるかが決まってきてしまう。伝えることの裏側には聞く姿勢も同時に存在し、その両方があるのはじめて「伝わる」のだろう。私は、伝えることは非常に難しいことであり、仕事は伝えることの連続で成り立つものなのだと実感した。人と人がかかわり合って構成する仕事

では、常に「伝える」という行為が重要になっているのだと思った。

次に二つ目だが、NPOのボランティアで実際に高齢者の方からお話を伺ったことである。昭和を生きてきた経験を「道具」を切り口にお話を伺ったのだが、その中で最も印象的だったのは、どの方も自身がそれぞれ生きてきた、自分にしかできない話をとてども大事にしているということだった。そして、そのお話をなさっている間、本当に嬉しそうにっていて、とても輝いて見えた。高齢者は何かを伝えたがっていたのではないだろうか。私たちはもっと高齢者の方と話す機会を得るべきだと思う。お金では決して買えない経験と思い出を伝えるということは、何かとてつもなく偉大なことのように感じた。生きて記憶を伝えるということは、自らが生きて証を残すことなのだろう。そして人々は、何かを伝えるために生きていないだろうか。人に伝えて初めてそこにリアクションが生まれる。会話などによるコミュニケーションだけでなく、芸術活動もまた然りである。

この経験から私は伝えるという行為の大切さを深く感じたのである。また、相手をより理解するためには、相手の生きた時代を知る必要があるということも考えた。そして、他人の話を聴くということは、心がなければできないことだということも感じた。本来人は人の話と心に耳を傾けることが難しいのだと思う。だからこそ、今後の人生において、人に伝え、人から伝えられることは幸せな行為なのだとすることを忘れずにいたい。

■伝える■

私が考える「伝える」とは「伝えることの大切さ」であると思います。お互いの意見を出し合うこと。お互いに意思疎通ができていないこと。これらが成されていないと、人付き合いが上手くいかないことがあったり、共同作業をスムーズに行うことが困難になったりします。それは、会社であれば仕事がスムーズに進まず、会社の運営に支障をきたします。また、人付き合いであれば、聞き手であっても話し手であっても、上手く意思が伝わらなかったり、話し手の意図をくみ取れなかったりと、お互いギクシャクするかもしれません。人は一人では生きていくことはまず不可能であると思います。そうした中で、お互いの意図を「伝える」ことであるコミュニケーションは非常に重要なものであると思います。

ここ最近、就職セミナーや企業の説明会などで盛んに、「コミュニケーション能力が必要な能力である」と聞きます。「伝える」というコミュニケーション行動。つまり、「聞く」・「話す」・「読む」・「書く」という能力が低下しており、円滑に仕事ができるようにするために、能力の向上が必要であるとのこと。実際、敬語をはじめとして、正しい日本語が使えない。挨拶がきちんとできない。といった、人と接するうえでの必要なことが疎かになってしまっているのではないのでしょうか。疎かになっていってしまうと、「伝える」という行動が成り立たなくなってしまいます。

疎かになってしまう理由として、相手が言っている事は理解できても、その奥にある話し手の感情や思考を汲み取る事ができないということが最大の原因ではないのでしょうか。つまり、相手

の顔をしっかりと見て話をする。話を聞く。という習慣が子供のころからないがために、話し手の表情がわからず、相手の感情・思考を理解することができないのだと思います。ダブルスを組むスポーツ選手のように、「あうんの呼吸」・「アイコンタクト」が必要であるというレベルまでは必要だとは思いませんが、普段の人付き合いであっても、話し手の表情から何かを汲み取ったりすることは非常に重要なことであると思います。

「伝えることの大切さ」イコール「伝えられることを理解する大切さ」であると思います。ただ、相手が話すことを理解するだけでなく、その言葉に込められた話し手の感情や思考を汲み取ることが「会話」という行動を紡ぎあげていきます。だからこそ、「伝える」という行動は、話し手にも聞き手にもなる私たちにとって大切なことであると思います。

■伝える○○■

「伝える○○」と夏合宿でテーマを聞き、最初に頭に浮かんだのは「気持ちを伝える方法」でした。伝え方ってなんだろう…と考えた時に、言葉だけではない！と、そう思ったのです。人間は言葉を用いて相手方に伝えます。しかし、言葉を喋る事が出来ない人間も中にはいます。そうした人が気持ち伝えるとき、一体どうしているのでしょうか。言葉を使わなくたって沢山伝える方法があります。手紙だって一つの例であるし、アイコンタクトも伝える方法の一つであります。言葉を喋れない人と、先ほど限定しましたが、日本人と外国人の場合はどうでしょうか？言葉が分からない人同士が会話する場合も同様に、気持ちを伝えることが出来ません。自分が英語圏外の国で、喋る事もできない国で…必死に(道や店の営業時間を)聞いた事があります。紙に書いたり、身振り手振りだったり…。相手方は一生懸命聞いてくれて一生懸命伝えようとしてくれました。伝えようとする事は、必ず伝わります。それがどんな方法であろうと絶対に伝えたい！という気持ちは形にできるものです。それが伝わるかどうかは別ですが…。ヒトと動物の場合だと話すことも出来ないし、紙に書くことも、ジェスチャーも出来ません。だから、気持ちを伝えられない！ということはまずありえません。動物とヒトがどうやったら気持ちを伝え合うことが出来るかという話はまた別ですが、生き物と生き物である限り伝える方法というのは限りなくあると考えます。自分なりの伝え方、それが一番なのは、と思いました。まずは伝えようとする気持ちが大事です。

最後に人間は、限りない方法手段の中にある「言葉」という一番伝えやすい方法手段を持っているくせに、うまく活用しきれないところがもどかしいと思いました。

■伝えるということ■

「伝える○○」というテーマを与えられたとき、まず考えたことは、相手に何かを伝えるときにどんな手段があるのだろうか、ということだった。言葉、文字、動作、表情…と挙げているうち

に、私が体験した二つの出来事を思い出した。

一つ目は、アルバイトでの出来事で、話すことができないお客様を接客したときのことである。最初は戸惑いもあった。相手には私の言葉が聞こえないのに、どう接すればよいのかが分からなかったからだ。しかし、相手に伝えたいという精一杯の気持ちで相手と接していれば、自然と身振り手振りが大きくなったりして、言葉が無くても不思議と「会話」は成り立っていたのである。私は、伝えることというのは一番に自分が発する言葉やその意味が大事だと思っていたが、そうではなく、相手に伝えようとする気持ちが大事なのだということを実感した。

二つ目の出来事は、就職活動で個人面接を行っていたときのことである。その企業は、大企業且つ有名企業であった。なので、私は面接を受けようという気になったのである。しかし、そのような志望理由であったから、他に理由を見つけるのも大変であったし、その企業が第一希望だったわけでもなかった。面接にはあまり身が入らなかった。それは自分でもマズイと思っていたので、なるべく隠そうとはしていたが、そこは、さすが大手企業の人事部という感じで、相手には見抜かれてしまった。見抜かれたことは私もすぐに分かった。その面接は案の定上手くいかなかったが、その面接のおかげで大事なことを学んだ。いくら言葉をきれいに飾り立てても、肝心の気持ちがそこにこもっていなければ、そのことは相手に伝わってしまう。また、上手く言葉に出来なくても、たくさんの気持ちがこもっていれば、相手にはちゃんと伝わっているのだ。

誰かの言う言葉や、誰かの書いた文字、絵、モノ、音楽などに私たちの情や心が動くのは、そこに何かしらの気持ちがこもっていて、それが私たちに伝わるからであろう。伝えることにおいて一番重要なことは気持ちであると思う。

■伝わり方の方程式■

伝えるということは簡単なことではない。なぜなら、自分がその人に対して何らかの情報を与え、それを相手が理解して初めて伝わったと言えるためである。その手段として私達は言葉を最も多く用いる。日常生活を営んでいく上で切っても切れない関係にあるのが言葉、つまり多くは会話だ。会話によってお互いの情報を伝え合い、ほとんどはそれが伝わりあっているように思われる。しかし、時に伝わらないこともある。それは言ってもわからない人の存在だ。

以前電車で帰宅中に男性が口論しているところに遭遇したことがある。一人はすでに落ち着き、もう一方の男性をなだめようと言葉をかけていたが、その男はまったく聞く耳を持たず、ひたすら罵声を浴びせ続けていた。まさに馬の耳に念仏状態であった。この聞く耳を持たない、言ってもわからない状態を脳の面から分析した書物がある。ベストセラーにもなった養老孟司氏の『バカの壁』である。以下に多少の引用をする。

事例の状態を脳の入力、出力の面から考える。入力は五感によって脳に情報が入ってくることで、出力はその情報に対する反応、具体的に言えば運動のことで、入力された情報について考えを巡らせることも含む。この入力を x 、出力を y とすると $y=ax$ という式が考えられる。この係数 a は本書でも具体的には述べられてはいないが、現実の重みと表現している。通常の場合は入力

xがあれば、人は何らかの反応をする。しかし、 $a=0$ という場合がある。それは $y=0$ を意味し、上記のような例のことだ。なだめるといふ入力をしてても反応がない。その人にとって自分は悪くない、つまりなだめられるようなことをした現実が無いのである。よって与えられた情報に対して反応しないという結果に至った。

上記の例は特殊なケースだが、人は与えられた情報に対して必ずしも何らかの反応を起こすとは限らない。興味、関心がないために人の話を聞かないといった事もあるだろうし、自分自身を振り返って見みても否定はできない。 $a=0$ の状態はあるということだ。しかし、私は係数 a を 1 でも 2 でも 0.1 でもいいから持っていたい。0 には決してしたくない。そこからは何も生み出されはしない。しかし、たった少しの数でも持ち合わせていればそれがきっかけとなり、1 が 100 にも 1000 にもなる可能性がある。それは、今まで興味や関心がなく、現実の重みとして受け入れてこなかったものの少なくとも側面を知ることができ、それに対して積極的にアプローチしていくことの可能性が秘められているということだ。

確かに避けてきたこと、関わってこなかったことに対して関わろうとする姿勢を保つことは骨が折れると思われる。しかし、生きていくうえで会話は必要不可欠だ。その意味でも新しい自分を見つけるためにも係数 a をあらゆることに持っていたい。

■伝える方法■

人に自分の気持ちを伝える方法として私たちはいつも言葉を使っている。言葉があるからこそ、人と人が相互にコミュニケーションすることができるし、相手の考えていることを知ることができ、また自分の考えを伝えることができる。しかしそれと同時に言葉には負の側面もある。人によって言葉の重みに違いがあるし、言葉は時に嘘をつく。現代社会はコミュニケーションのための媒体が数多く存在する。ブログ、メール、掲示板等々。これらの媒体は使いようによっては非常に便利であり人と人を結び付けていく素晴らしいツールにもなりえるが、間接的なコミュニケーションなので相手の考えていること・気持ちを表情から理解するような洞察力は養われないし、その人と真に会話しているとは言い難い。高度情報化社会といわれる今、私たちにはコミュニケーション能力が求められている。現在の社会インフラによって若者たちが真のコミュニケーション能力を養うことが難しくなっているのに、社会はそれを求めているのだ。実に皮肉な話である。しかし本当のコミュニケーション能力とはそもそも何なのであろうか。人に自分の気持ちを伝える力と考えるならば、その方法をあえて言葉に限定する必要はない。話すことが得意だからと言ってコミュニケーション能力が高いとは一概には言えないのではないか。手紙、写真、絵、表情、行動など言葉以外のたくさんの方法がある。コミュニケーションによって自分の気持ち・考えていることを相手に伝えることはとても大切なことであるが、話すことが苦手だったり、不器用だったりしてうまく言葉にできないこともある。そんな時は他の方法で自分の気持ち・考えていることを伝えてみてはどうだろうか。言葉にすると軽くなってしまうようなことでも、他の方法を使えば相手により深く自分の考えていることを伝えることができるかもしれない。人間の

脳は著しい進化を遂げ、言葉の使い方は劇的に向上したかもしれないが、口先だけで軽く相手の心に訴えかけるより、重みのある言葉や他の方法で、もっと深く相手に伝わることを忘れたくない。

■何を伝えていくのか■

1ヶ月ほど前に、テレビでアメリカの不妊治療の番組に目が留まった。その番組の中では、アメリカの人工授精の実態が取り上げられていた。不妊に悩む夫婦が卵子バンクや精子バンクに保管されている、見ず知らずの人の卵子・精子を買い、受精させるのだ。この人工授精はこれまでアメリカでは多く行われてきた。しかし、日本ではこの卵子・精子バンクの人工授精は認められていない。不妊に悩む日本人がアメリカで人工授精を成功させたケースが多く報告されている。最近、60歳の独身女性がアメリカで受精卵の提供を受け妊娠に成功させたというニュースもあった。また、そのテレビ番組では30代後半の独身女性が結婚はしたくないが子供は欲しいという理由で、精子バンクで精子を購入し受精させるという事例もあった。

私は、このテレビやニュースを見て驚きと共に怖さを感じた。本来、卵子・精子バンクは不妊に悩む夫婦のために卵子・精子を提供してきた。それが、最近アメリカでは、例え結婚してなくても子供が欲しいと思えばどんな人でも子供を作ることができるようになってしまったのだ。ここまでくると、命の重さが軽くなっているように感じる。人の命を凶ることはできないはずであるが、実際、卵子や精子が売買されている現状を知ると疑問を持たざるにはいられない。まるで、ペット感覚で子供が作れる時代に今や近づいているのだ。

このようにして生まれた子供に、親は何を伝えていくのだろうか。普通なら父親と母親がいて子供がいる。しかし、この人工授精で生まれた子供は、片親の存在は全くと言っていいほどない。どこのだれが親なのかも分からないまま育っていく。育てている親も誰との子供か知ることはない。だからといって、人工授精で生まれてきた子供を否定しているのでは決してない。このような人工授精が可能になったいま、今後、生まれてきた子供に対して親が何を伝えていきながら育てていくのかにかかっている。命を簡単に誕生させることはできないのだから。

■伝える心■

人に何かを伝えるとき、重要なのは心である。心のこもった言葉。これが一番人の心を動かせるものである。どんなにいい言葉であろうとも、そこに心が込められていなければ何も伝わらない。言葉を発することは簡単である。だが、人の心を動かすことは用意ではない。同じ言葉でも言い方しだい。心の込め方しだいである、と思っていた。

しかし、本や広告などの文章を見て、深い何か伝わることもある。例えば、真っ白な巨大な看板の中央に小さく、

「世界は広い。」

これを読み感じるの、世界が広いと言う事実ではなく。あなたは小さな存在。思い上がるな。周りを見なさいということである。私であれば、この文章に謙遜心を感じた。さらに、まだまだ世界は広いのかと、向上心も抱ける気がした。なにを感じるかは、人それぞれである。これが作成者の意思に沿っているかわからないが、何の考えも無くこの文章が作られたとは思わない。そこには確かに作者の意思が、心が込められているのではないだろうか。

文章に心は込められているのか。文と文を比べて、これは心がこもっているとか、こっちはこもっていないとか、そんなことがわかるはずはない。では、なぜ文章に人は思いを感じるのか。思うに、心の豊かさが重要なのではないだろうか。文を読み、深い思いを感じるには、自分自身ゆとりが必要である。ここでもやはり重要なのは心である。伝えるにも感じるにも、心のあり方が重要ではないだろうか。何かを感じたり、感じさせる、伝える上で重要なのは心である。心があればこそ、人は思いを伝えられ、感じる事が出来るのではないだろうか。

言葉は時に人を傷つけ、治しようのない傷をつける凶器である。不思議なもので、いやな事は、心などこもってなくても、人の心に突き刺さるものである。ただこの時、伝えた側はおそらく何も考えず、その言葉を発している。もしかしたら、何かを伝えたくて、叱るのかもしれないし、非難をしているのかもしれないが、そうであるとするならば、十分に注意を払わなければならない。いやな言葉ほど、人には深く突き刺さり、容易に伝わってしまう。どのようにその言葉を伝えるかは、言い方一つ。心の込め方一つである。

人に何かを伝えるとき、心は非常に重要なものである。自分の考えを他人にわからせるわけだから、その言葉の真意を人に伝えることは非常に難しい。しかし、励ましや、非難や、指摘、感謝、主張。すべてにおいて、心がこもれば伝える事が出来るだろう。人が思いを伝えること、感じる事が出来るのは、心があるからなのだから。

■伝達手段の多様化■

時代の変化と共に、情報の伝達手段も変わりつつある。今日では、居乍らにして世界各地の情報をリアルタイムで得ることができる。また、情報の発信者としても、ブログやSNS等を駆使して、自らの情報を世界各地に発信することができる世の中となった。誰しもが国境を越えて自由に情報交換でき、顔を知らない相手とも一種の「コミュニケーション」を取れる時代である。情報伝達手段のデジタル化によって、それが伝わるスピードは速くなり、広がりも格段に大きくなった。しかしながら、その反面、「アナログ」な情報伝達手段が敬遠されているように思える。利便性・効率性を追求するあまり、現代人はface to faceの伝達を嫌い、またそれを苦手に行っている人が多い。外界との繋がりを遮断して、自分の殻に閉じこもってしまう人々が社会問題となる背景には情報のデジタル化が大きく関わっているだろう。

様々なモノがデジタル化している現代。人々は、社会は、どこかで「アナログ」を求めている。例えば、就職活動。今盛んに叫ばれている言葉は「コミュニケーション能力」。相手の意見を聞

き、自分の考えをどのように相手に表現できるか…。人と顔を合わせて話すことが少なくなった今だからこそ、求められる能力ではないだろうか。(コミュニケーション能力自体、具体的には何か分からないのだが…)

自分の言葉で face to face で伝える。デジタルなモノが普及する今だからこそ、アナログを大切にしていきたい。

■伝える信頼■

今回の伝える〇〇というテーマを考え、私は伝える信頼ということで書いていこうと思う。私は母校で、部活の顧問の先生に頼まれ、コーチという形で後輩を指導しています。そのなかで、気づかされたことがあります。それは信頼してもらうことの難しさです。

母校の後輩とはいえ、同じ時期に部活に在籍していたわけではないので、生徒たちは私のことは知らない。そんな中でも、指導することへの不安はあまりありませんでした。けれども、開始当初はなかなかうまくいきませんでした。というのも、生徒が部活の顧問の先生と私のアドバイスを聞いている時の感じが違いました。ようするに、私のアドバイスにたいしては、半信半疑のような感じでした。ここで、まだ信頼されていないのだと初めて気づかされました。このことは、指導するという時に、大きな問題で、練習中のアドバイスにしても、試合中のアドバイスにしても、この信頼があるかないかでは大違いです。

では、この信頼をどう作っていかうかと考えたときに、私が生徒であったときの、中学時代の部活の恩師のことを思い出しました。その頃の私は、その先生のことを信頼していました。練習中や試合中のアドバイスを迷い無く受けとめることが出来ていました。それと同時に、私も先生から信頼されている、というふうに感じていました。今、考えてみると、このことが重要だったのではないかと、思いました。相手から信頼されているということが伝わることによって、その信頼に応えようとするのではないかと。そう考えるようになってからは、信頼されるための努力ではなく、まずは信頼を相手に伝えることを意識するようになりました。もちろん、これも簡単なことではないし、すぐにうまくはいかなかった。けれども、徐々に生徒の様子が変わっていくのが、私なりに感じ取ることはできました。

今回は、私の実体験という形でかいたけれども、信頼ということは、いろいろな人との付き合い方の中でも重要だと思います。もちろん、信頼しすぎることはよくないこともあるかもしれませんが、けれど、人との信頼ということを大切にしていきたいと思っています。

■伝える一歩■

「伝える」という行為を行う際、使う手段を考えてみる。まず初めに思い浮かぶのは、やはり「言葉」を手段としたのものである。人間は自分の頭の中に存在するあいまいな概念を、言葉で明確

化し、そうすることで認識しようとするのではないだろうか。私はそう考える。だからこそ、例えば自分の感情を他者の誰かに伝えたい時、私たちは言葉を頼りにするのだと思う。

では、“言葉”を使用する能力を持っていれば、「伝える」ことが可能なのか。それは違うだろう。そもそも「伝える」とは何か。伝わりと聞き取るとでは大きな違いがある。聞き取るとは、相手が発した言葉を認知するといったニュアンス。一方伝わりとは、より高次元の、“認識”や“理解”といった段階への到達を表すニュアンスをもつものではないか。それならば、ただつらつらと無感情に単語を並べた言葉を発するだけでは、「伝えた」事にはならない。

伝えるためには、その情報の発信者と受信者が、共に作り上げる雰囲気ともいえる環境作りが必要であると私は考える。ここでまず重要となるのは、発信者の伝える態度であるだろう。フェイストゥフェイスの場合において、“言葉”を伝える手段とした場合を考えてみる。この場合のコミュニケーションに存在する要素は、声のトーン・抑揚・速度などといったものが挙げられる。聞き心地の良いトーン、リズムがあり感情の表現が豊かな抑揚、そして相手の聞き取りやすさ、相槌などに合わせた速度、さらにはアイコンタクトや、好意的な表情など、これらを発信者が意識し、態度に表すことで、情報の受信者側への誠意が生まれると思われる。そして、こうした誠意は、無意識にも受信者側に影響し、受信者側にまず「聞く姿勢」が持たれるのではないだろうか。受信者側に聞く姿勢が持たれば、伝わる第一歩が踏み出せる。そして、受信者側に、発信者の情報が伝われば、受信者もそのことに対して、なんらかの伝えたいものが生じることはあるだろう。次には、聞く姿勢が元の発信者側に求められる。このように、一方通行ではなく、双方に聞く姿勢が存在すれば、互いが互いの思いや感情を伝えるのに、有効な連鎖反応を生むことに繋がるであろう。要するに、伝える側にも聞く姿勢をあらわにする事は、自分が何か物事を伝える際に、プラスに大きく関わる事柄なのだと思う。

私は人と話す時、ただ私の言葉を聞き取ってほしいからといった、自己満足のために話すのではない。自分の考えや、その相手に対する思いや感情を、理解し、汲み取ってほしい、言葉でもってそれらを伝えたいと思うから話すのだ。それと同時に、その相手のことを、私も知り、さらには理解したいと望む。私の中にこのような思いが存在する限り、私は全身全霊でもって、私が考える伝える環境づくり、すなわち誠意ある態度を表すことに励む。それが、私の伝えたいものを確実に、なおかつ好意的にその相手に伝えるための、第一歩であると信じているからだ。

■伝える思い■

私は「伝える思い」というのをテーマにして、エッセイを書きたいと思います。私は昔から極度の上がり症で、人前に出て話すということが大の苦手で、最も嫌いなことのひとつでした。この性格のせいで、損をしてきた部分も、正直あると思います。「何で自分はこんなに緊張してしまうのだろう」、「何でもっと上手く話すことができないのだろう」、と思うことがよくあり、悩んだこともありました。

でも、ゼミに入ってから、そんな自分が少しずつ変わってきたような気がします。みんなの

前に出て、何回も発表をしていくうちに、自分の自信に繋がってきたように感じます。ゼミという場で、みんなの考えや意見を聞くようになってから、自分の思っていること、考えていることは言葉にして出さなければ、伝わらないということ、改めて実感するようになりました。文字にすると、当たり前なこと、簡単そうに見えるのですが、自分の思いや考えを言葉にして伝えるということは、非常に難しいことであり、尚且つ、重要なことであると、よく感じます。今まで、発表をする上でも、文章を書く上でも、「こんな風に言えたらもっと伝わったのに・・・」と思うことが、何度もありました。こんな経験を生かしつつ、これからの限られたゼミ活動を通して、自分自身を向上させていけたらと思います。

『「伝える○○」というテーマでエッセイを書く』、今回のこの課題を見たとき、頭の中にすぐに浮かんできたのが「思い」という言葉でした。それは、佐藤ゼミに入って2年弱、ゼミ生のみならず様々な問題について考え、議論し合ってきたからだだと思います。自分の考えに対して、真剣に考え、意見を述べてくれるゼミ生という存在を持つことができた私は、本当に幸せだと思います。だからこそ、「自分の考えや思いというものを、ゼミという場で、もっとみんなに伝えていきたい」、その思いから、今回のエッセイのテーマを「伝える思い」にしました。去年、私のStudyグループは、「言葉の持つ力」というものをプレゼンのテーマにして、発表をしました。私は、言葉には、少なからず力というものがあると信じています。これから先、就職活動、また社会人になってから、様々な場面で、自分の思いや考えを述べるということが問われると思います。そのような場面に出会ったとき、はっきりと自分の言葉で相手に伝えることができるように、日々、努力していきたいと思っています。

■伝える＋伝わる＝伝える■

夏合宿で、みんなのスピーチを聞いてからもうすぐ1ヶ月が経とうとしている。あれから自分の身の回りのことを考えて、伝えることの難しさを実感している。

私は今、モチクリームというお菓子屋さんでアルバイトをしている。このモチクリームというお菓子はよくお客様に「これはどんなお菓子なの？」と聞かれることがある。そして、私はマニュアル通りに、「冷たいお大福になります。」と説明している。きっとこの答えだけではモチクリームについて何も伝え切れず、お客様は何か分からずに買って帰ることが多いだろう。相手が知らないものを言葉だけで伝えることはとても難しく、食べてみれば分かることなのに、言葉で伝えることができない自分をもどかしく感じる。

分かっているけど伝えられないこと。伝えることは難しい。

最近ニュースを見ていて色々なことを伝えられること、教えられることが多いと感じることがある。ミャンマーで射殺された長井さんは、伝えるべきことがあるなら、誰かがいかなければいけないと思いミャンマーに向かったと言われている。長井さんはミャンマーの現実を私たちに伝えるために危険な立場にあいながらも取材を続けていたという。私たちが生きている上で知らないことはたくさんある。色々な人が何かを伝えようと発信しているのだが、それを受信しなけれ

ば伝えたことにはならない。長井さんは命をかけて私たちに何かを伝えようとした。人によって、長井さんが発信した想いを色々な感じ方で受信したはずである。伝えることは相手に伝わって初めて意味を持つ。分からないことを誰かに伝えてもらうこと。そして、それを受け止めること。

最後に私には、自分の気持ちに素直になれず、本当の気持ちを伝えることができないこともよくある。言葉では、自分で思ってもいないことを言ってしまうことは皆にはないだろうか。自分の気持ちに素直になり、相手に伝えればいいものをなぜか私は自分の気持ちを裏返して言葉にしてしまう。きっと、言葉の奥にある本当の気持ちを相手に悟ってもらいたいのだと思うが、果たして私の想いはどれほど伝えることができたのだろうか分からない。自分以外の人がいるから何かを伝えることができる。伝えたいことが伝わった時うれしい気持ちになる。だから、私たちは何かを伝えるときに、分かりやすく伝える努力をしなければならないと改めて感じた。そのためには自分の気持ちに素直になり、正直に自分の気持ちを相手に伝えていきたいと今回の課題を通して強く思う。自分の気持ちに素直になることは思っているよりも難しい。素直になることだけでも難しいのだから、それを伝えることはもっと難しい。でも、私たちは伝えることを恐れずに発信していかなければならないのではないだろうか。

伝えることは大事なこと。伝えられることがあること、伝える相手がいることそれは幸せなこと。

■伝える■

私の夢はアナウンサーになることです。アナウンサーは「伝える」仕事の代名詞のような存在で、誰もが一日に一回はテレビでアナウンサーが伝えるニュースを耳にしていると思います。私がアナウンサーになりたい理由も、自分の感じたこと、目を見たことを自分の言葉で伝えたいと思ったからです。

私は、夏前からアナウンススクールに通ってアナウンスの勉強をしているのですが、その先生から「アナウンサーは事実を正確に、わかりやすく、聞きやすく伝えることが仕事です。テレビという影響力の大きいメディア上で、アナウンサー自身が意見を言うのはあまり、いいこととは考えられていません。」というようなお話を聞きました。なんだ、自分の意見は言えないのか、つまらないな、と思っていました。でも、このエッセイの題材「伝える」について考えていて、アナウンサーは言葉で自分の意見を伝えるだけじゃなくて、表情や声のトーンや、気持ちの込め方で伝えることもできる、そう思うようになってきました。特に大切にしたいのは「気持ち」です。ありきたりな言い方なのですが、気持ちがこもっていれば伝わるものがあるのだと思っています。

小学校から高校まで演劇をしていたのですが、気持ちがこもっている人の演技は何か違って見えたし、伝わってくるものがありました。悲しいシーンでは感動できるし、深刻な場面だと気持ちが重くなる。私の理想は、こういう、感情を伝えられるようなアナウンサーです。ニュースをわかりやすく、感情をリアルに「伝える」ことができたらなと思います。とはいうものの、私は

自分の思い（想い？）を人に伝えることが苦手です。思ったことがあっても、言えなかったり、言わなかったりがほとんどです。何かの本で、人に自分の想いをぶつけることで、本当の意味での人間関係を作っていける、というのがありました。確かに一理あるなと思ってしまいます。心の奥を伝えるわけだから、腹を割った仲的な、深い関係になれるのかなと。まず、自分の思いを人に素直に伝える努力をしてみる。これは、私のこれからの目標です。

最後に、私はアナウンサーになる的発言を連発しましたが、もし万が一なれなかったときに、後ろ指ささないでください（笑）。

■伝える気持ち■

私は、合宿後のエッセイで『ありがとう』という言葉を入れ、文章を書いた。その時は、『ありがとう』という言葉がグループのメンバーや、他のゼミ生に伝えたい！と思い、選んだのだが、改めてこの「伝える〇〇」というテーマと向き合ってみると、人に何かを伝える時は、やはり『気持ち』が一番大事なのだと思った。また、『気持ち』というのは、私が今誰かに一番伝えたいことであり、それと同時に、伝えようとしていないことでもあり、自分は伝えているつもりでも、相手には伝わっていないという、とても複雑なものであり…、少し自分の中で整理したいと思い、このエッセイでは『気持ち』を入れることにした。

自分が思っていることを人に伝える時、たいていは『言葉＝日本語』を使う。しかし、それが時々相手に通じない場合がある。そんな時は、ほとんどの人が、ジェスチャーや表情、かたことの英語などを用いて、相手に伝えようとし、その努力が実り、相手にある程度の意味が伝わったりする。それは、相手にこれを伝えたい！という『気持ち』がこもっているからだと思う。相手と同じ言語を使っていると、ひとつひとつの言葉に共通の認識があるため、気持ちがこもっていないと、本来の言葉の意味が伝わりにくいばかりか、マイナスの印象を与える場合がある。実に悩ましいことである。

最近私は、伝えたい言葉に『気持ち』をこめることができていないと思う。また、相手に何かを伝えようという思いも半減し、伝えても無駄だと思うことさえある。しかし、心のどこかでは、この想いを誰かに伝えたいという気持ちもあり、自分の中で整理できずにいるのだ。

「伝える気持ち」。それは、相手に伝えたいこと・言葉に、自分の素直な『気持ち』をこめることなのではないだろうか。たとえ、うまく言葉で伝えられなくても、気持ちだけは相手に伝わるようになりたい。これがこのエッセイを書き終え、思ったことである。

■伝わる・伝えたい気持ち■

テーマを聞いたとき、最初に考えたことは、相手に伝わる気持ち(相手が受け取る気持ち)と本当に自分が伝えたい気持ちが必ずしも一致するとは限らないということだった。それゆえ、伝える

手段は、言葉(声)、表情、手紙、メールなど様々あるが、本当の自分の気持ちを伝えることは、簡単なことのように、簡単なことではないと思う。そして、ただ口先だけで気持ちを言っても、相手に伝わらなければ意味がないからである。

私は中学校の時に、相手に自分の本当に思っている気持ちを伝えることにとっても苦労した。引っ込み思案で、恥ずかしくて伝えることができなかったというわけではなく、表情が硬く、目つきもあまり良くなかったので本当に思っていることを伝える前に、相手に自分の気持ちを予想されてしまっていたのだ。実際には全く怒ってなく、機嫌が悪いわけでもないのに、“怒っているの？”と聞かれたり、“元気ないね”と心配されたりした。自分の思っていることを勝手に予想され、誤解されたまま接せられることがショックでもあり、寂しさを感じたのを今でも覚えている。それ以来、表情は人に与える自分の印象において、とても重要なものであると認識し、気を遣うようになった。アルバイト先に外国の人がよく買い物に来る。私はレジ業務なので必ず関わることになるが、必ずしも英語でコミュニケーションが取れるわけではないので、少しでも日本語を話せる人には、いつもより口を大きく開け、はっきり発音するようにし、できるだけ不快感を相手が味わうことのない様に表情に気を遣って接客している。そうすると、帰り際に“ありがとう”と笑顔で言ってくれる。言葉は片言でも、表情で私が思っていることが伝わったのだと、とても嬉しくなる。

人は、相手の気持ちを、発せられる声、声のトーン、表情から受け取るのだと思う。口でいくら言っても表情は、口で言っていることと逆であると、自分の思っていることを伝えることはできないだろう。だから、私は自分の気持ちを相手に伝えるためには表情というものがとても重要になってくると思う。むしろ、表情によって、この人は本当に心からそう思っているのだなあと思うことや、この人は上っ面だけなのかなと思うことが、誰しもあると思う。そして、言葉はなくても友達の表情をみると救われることもあるだろう。逆に表情によって不愉快になることもあるだろう。

自分の思っていることを伝えようとこの文章を書いているが、うまくまとまっていないかもしれない。しかし、結局、私がこのエッセイで伝えたいことは、気持ちを相手に伝えるということは、簡単なことではなく、気持ちは様々あるのだから、自分の気持ちを伝えるためには、言葉(声)だけでなく表情が重要になるということである。これからは私は、表情に気を遣いながら、自分の気持ちを伝えていけたらいいなと思っている。

■伝える■

ゼミ生活(あえて学生生活とはいわない)も残り僅かとなった今、自身のゼミ活動を振り返ることで年長者としての語る(=伝える)義務を果たしたいと思う。ここに綴られる文章は僕がゼミ活動を通じて何を考え、何をしてきたのか、そしてゼミ活動において何が大切だと考えているのかを紙幅の許す限りで披瀝したものだ。伝えたいというよりもとりあえず伝える。何が伝わるかはわからない。何も伝わらないかもしれない。

先生との出会いは3年前の『社会経済学基礎』の授業でのことだ。当時、文章を書くことに強い劣等感を抱いていた僕はレポートの提出が課されるこの講義をきっかけに書くことに挑戦しようと思決意した。人生で初めて書いた『若者の職業観』という4000字のレポートが僕と先生の橋渡しとなった。今振り返れば、この時間間違いなく僕の人生は好転した。この課題を通じて書く、そして考えることの面白さを経験した。その後の僕はより書く(考える)ことへの意欲を増し、「知的スキルの向上」を掲げていた佐藤ゼミの門を叩くことになる。

入ゼミ後は「学生生活」が「ゼミ生活」へと変わった。ゼミでの課題が辛いとか多すぎると思ったことは一度もない。どの課題も当時の僕にとって知的な興奮を湧きあがらせるものだったからだろう。僕にとって課題とは「課されたことは最低限こなし、課されていないことへ手を伸ばす」ことだ。課題に淡々と取り組むだけでは先生から教えられるだけになってしまう。教えられただけでなく、奪い取るくらいの気持ちと姿勢で取り組んでこそ「大(いに)学(び)生(きる)」といえる。

とはいえ、初めからそう上手くいくわけもない。だから(無意識に)僕は「先生を真似ること」を繰り返してきた(ている)。その過程で研究室へは何度も足を運んだ。書棚に並ぶ本は先生の頭の展開図だと思って眺めた。勧められた本は殆ど読んだ。新聞も読むようになった。いつもしつこく背中を追っていた。

1年位前からメールを通じて日々考えることをぶつけ始めた。真似ていただけの自分を壊し、新しい自分を創ったのだ。書くことが大の苦手だった3年前と比べると考えられない変化だと我ながら驚く。今では書くことが素直に楽しいと思える。もちろん、その過程にある、読む、聴く、話す、そして考えることも然りだ。

コミュニケーション力なる曖昧模糊としたこのことば。社会人に一番求められるという能力とされる。その答えは十人十色であり、だからこそ各々が考えることが大切となる。僕にとってのコミュニケーション力は読み、書き、聴き、話しを通じて考えること。それは何も硬い話だけに限ったことではなく、硬軟のバランスも肝心だ。そして力をつけるにはやはりしつこいほどの継続が鉄則である。

僕は学生期間を特別な期間だとは考え(たく)ない。学生にしかできないことは少ないはずだ(と思いたい)。そこでのどんな経験(結果)でも受け入れる。その経験が、たとえ今は無意味なことだとしても、後々に意味のあることにするくらいの気概ある人間になりたい。これまでのゼミ生活で考えたあらゆることは今後も僕の血肉となるはずだ。だからこれからも変に構えることなく、ただ考え続ける姿勢だけを貫いてゼミ生活を終えることにしたい。

■伝える『声』■

ミャンマーで反政府デモが激化している。都市ヤンゴンではデモがあり、数千人が街を歩く。デモの背景にあるものは8月に行われた燃料価格の引き上げである。燃料価格の引き上げは、バスの運賃を上昇させ人々の通勤に影響を与えた。さらに食品までもが値上がりし、人々の生活は貧

困を窮めていった。そして今回、失政を重ねる軍事政権に対する不満が爆発し、ついに市民によるデモが始まったのだ。死傷者をも出す大規模なデモ。驚くべきことは、僧侶が参加している点である。私たちの僧侶に対するイメージは世俗を離れ、身を隠しひっそりと暮らすもの。政府に対しても不干渉でデモに参加するなど到底考えられない。だがイメージと現実は違う。僧侶は世に尽くそうとする心を持ち、人に対する思いやりや慈しみを持っている。国籍、身分、性別、能力、貧富、容姿などで差別することなく、平等に人を愛する。つまり僧侶というものは、どれほど突き詰めても「世のため人のため」なのである。今回も世間の喧噪から逃げ出さず、どのようにすれば良い世の中が創れるかを考え、人々の「声」を伝えるために今もなお街中を歩き続ける。

9月30日付の朝日新聞の一面。ミャンマーの記事の隣に「沖縄11万人が訴え」という見出しの記事が載っている。沖縄戦で日本軍が住民に「集団自決」を強制したとの記事が教科書検定で削除された問題で、検定意見の撤回を求める集会が開かれた。11万人が集まり検定意見の撤回を訴えた。「集団自決」の撤回が採択された理由として、自決を否定する資料があること、自決を命じたといわれる元軍人やその遺族の事実否定の証言があることが挙げられる。しかし、資料や証言の信頼性はあまりない。戦争責任を追及されていた瀬島龍三も今月、口をつぐんだまま亡くなっていった。真実とは闇の中に葬りさらされていくものなのだ。不確かな情報で「集団自決」の事実が削除されるため、辛い過去を背負ってきた住民が憤慨するのは当然。皆、戦争の悲惨さや平和の大切さを教科書に残すために団結し、心を一つにしている。一方、政府には柔軟な対応が求められる。11万人の思いを厳粛に受け止め、検定をやり直すよう働きかけるべきではないだろうか。「集団自決」によって命を奪われた人々の「声」は、集会に参加した11万人が伝えようとしている。二度と悲劇を起こさぬよう、その「声」は後世にも伝えられ続けるべきである。

平和なる時も混乱の世にも、あらゆる場所あらゆる時代にも、支配するもの支配される者が存在する。支配するものは多大なる権力を行使し、支配される者はその権力に屈し支配される、たとえその権力が不当なものであったとしても。しかし、私たちは不当な権力に屈してはならない。自由や権利、および自己の正当性を主張するためにも、絶えず「声」を伝え続けるべきであるのだ。決して「声」をからしてはならないのである。

■伝える気持ち■

「伝える○○」というスピーチのテーマ。私は「伝える気持ち」という題でスピーチしようと思っていた。今年の初め頃、私が教育免許の資格を取ろうとしていることを知っていたので、教師として働いている伯母から一冊の本を紹介された。その本のタイトルは西川つかさ著「ひまわりのかっちゃん」というタイトルの本である。これは著者の実体験を基にした自伝小説であり、決して奇跡ではなく、先生の伝える気持ちが生徒の心に通じた結果だと親や周りの人々は話していると言うし、私もそうだと思う。

内容は教育現場で起きた話で、舞台は昭和30年代の北海道。著者である西川司、通称「かっちゃん」は、はんかくさい子どもで、小学2年生に進級する春、今まで通っていた通常のクラ

スではなく、ほんの少しの知的障害からひまわり学級に入ることになった。当時は今以上に世間の目も厳しく、養護学級に対する差別的な見方があった。しかし、子どもにとって良いことならばそれでいいという葛藤があった。だが、入れたくないという気持ちから母は泣き崩れ、兄はあきれもの、特殊学級の意味を知らない本人はいたってのんきに「やったあ!」と心の中で叫んだりしていた。わかき学級といわれる特殊クラスに移されたかっちゃんは色々ありながらも学校に通った。ところが5年生の春、転校することになった学校には特殊学級はありませんでした。転校して困っているときに現れた一人の教師との出会いから学び、メキメキと力をつけた。「字書けながったり算数ができなかつたりしたって、なーんも恥ずかしいごとでもなければ、馬鹿でもはにかきさいごとでもなんでもないのさ」と言う先生を信じ、かっちゃんは勉強の楽しさに目覚めたのだ。二人の出会いにおいては運命・奇跡という言葉が当てはまると思うが、起こったことは奇跡ではないと思う。担任の先生が彼に、やる気によってなんでも克服できるということを見せてくれて、かっちゃんにその気持ちが届いた証拠なのだと思う。今まで出会ったことのないような先生と出会い、かっちゃんはぐんぐん成長していった。幼い頃から障害により知恵遅れと言われ続け、侮蔑な扱われ方をしていた子どもが、転校してたったの2年で、かっちゃんは6年生で卒業するときには成績もオール5で児童会長までやり、苦手なスポーツも良い成績を残せるようになった。

私はこの本を読んで、5年生の春に出会ったかっちゃんの担任の先生のように特別扱いをせず、伝えようとする心を持って、真剣に向き合えば何か起きるのだと思った。この先生の取った行動が全ての人々に当てはまるわけではない。このような接し方は嫌だという生徒もいる。しかし、何をすれば生徒の可能性を伸ばせるのかは普段行動を見守る必要があり、伝える気持ちがないといけない。私は合宿中にこのことを話し、人と人との繋がりが希薄化している現代において、心と心で接し、伝えることの難しさ・大切さを知ってもらおうとした。

■伝える背中■

言葉に出さなければ、自分の気持ちは伝わらない。

これは、世間一般的に言われていることだろう。確かに、昔に比べて縦社会の信頼関係が希薄になってしまった世の中では、自分が「こうしてほしい」という意思表示がなければ、上司の思いは自分には伝わらないし、自分の思いは後輩には伝わらないし、理解してもらえない。

私は、「縦の信頼関係」と「思いを伝える」という2点の間には、密接な関係があるのではないかと思う。そして、こんなにも広い日本という国の中でも、言葉に出さなくても自分の気持ちが伝わる社会は、必ずあると確信している。

私は、「佐藤ゼミ」という狭い社会で、2年間、多くの先輩や後輩と年に2回の合宿をはじめ、数々の辛い時や大変だった時、楽しい時を共に過ごしてきた。先輩達は、共同論文をはじめ、何もかもが初めてだった私たちに、色々なことを優しく丁寧に教えてくれたり、議論を活発化させてくれたり等、常に先頭に立ってゼミを盛り上げるために頑張ってくれた。だが、時には、私達

が知らない間に怒らせてしまったこともあったかもしれない。それでも、私達をリードし続けてくれたからこそ、私は常に先輩達のことを尊敬して続けてきた。そんな自分を含め、私達は「佐藤ゼミ」に入ってから今まで、先輩達の背中を追い続けながらここまで過ごしてきた。その背中は、とても大きく、威厳があり、決して追い越すことができなかった。私達が追い続けてきた先輩達の無言の背中から、本当に多くの事を学んできたと思える。

昨年11月。ただ背中を追い続けていれば良かった立場から、追い続けられる立場になった。立場が逆転してから、もうすぐで1年が経とうとしている。2回の合宿も終えた今、私達は、言葉ではある程度の事は伝えてくる事が出来たのではないだろうか。ただ、これまでの私達の背中から言葉では伝えられないことを伝えられてきたのか、と問われれば、正直自信がない。だが、背中から伝えることは、自ら意識して伝えることでもないと思う。もし、「伝えなければ」と意識して後輩に頑張って伝えたとしても、言葉で説明するのは難しいが、きっと「何かが違う」と心に響かなかった状態になってしまうような気がする。私たちが、ゼミは当然だが、何事にも一生懸命に取り組めば、後輩もその背中から、何かしら学んでくれるだろうと信じている。

私は、「佐藤ゼミ」という社会において、横はもちろんのこと、縦の信頼関係も常に濃厚であってほしいと願う。そして、その奥に存在する「多弁な口より、無言の背中」によって、各個人は大きく成長していくと思うし、そのキーワードが「佐藤ゼミ」らしさというものを維持していく手段の一つになると思う。

■伝える『命のバトン』■

私には長崎に住む祖父と祖母がいる。二人とも八十歳を超えているが、元気に暮らしている。孫の私からすると、お互い支えあって生きてきたようにみえる。

一九四五年八月九日、長崎に原子爆弾が投下された。祖母は小学生の私にこう語ってくれた。「一瞬光ったと思ったら物凄い音がしたから、外に出てみたんだよ。そしたら大きなきのこ雲があつてね。『ああこんなにも大きな爆弾を落とされたら日本はもう負けるね』って隣にいた義理の母が言っていたのだよ。」祖母は市街地から離れていたのが被害にあわずにすんだ。その後祖母は、電車の線路伝いに助けを求めてくる被爆者の手当てをしたと語ってくれた。その頃祖父は海軍の船で戦地に向かおうとしていた。しかし前に手術した傷が痛み始めてきてしまった。すると祖父の長官は、「おまえはもう帰れ」と言ったそうだ。そして祖父はそのまま戦地に行かずに帰って来て、終戦を迎えたそうだ。

その後二人は子供三人を産み立派に育て上げた。今では三人のひ孫までいる。もし祖母が市街地均衡に住んでいたら、祖母はいなかっただろう。もしあのときの長官が「帰れ」と言ってくれなかったら、祖父は戦地に行って帰ってこなかったかもしれない。戦争のあの頃、生きたくても生きられなかった人が大勢いたと思う。あのときの長官だってその後どうなったかは分からない。祖父の兄はシベリアで病気で亡くなってしまった。

二人は今の私と同じくらいの年代で戦争を体験している。二人が一生懸命あの時代を生きてくれ

たから、今の私がいる。祖父たちは、私たち次の世代にちゃんと「命のバトン」を渡してくれた。今の私に何ができるだろうか。

私は戦争を知らない。知りたくもない。今の世の中が平和だとは言い切れないかもしれない。でも私が育った世界は平和だった。あの戦争の頃、私と同じくらいの世代の人が数え切れないほど亡くなっていった。生きたくても生きられなかった。次の世代に何かを伝えられなかった人もたくさんいたと思う。私は今の現状に満足しているとは言い切れない。しかし彼らのことを思うと、ちゃんと「命のバトン」を受け取った私は恵まれているほうなのかもしれない。

私は日々を精一杯生きようと思う。がむしゃらでもいい。泥だらけになってもいいから生き抜いて、そして次の世代に「命のバトン」を渡し、何かを伝えたい。その責任を果たすことが、祖父祖母への恩返しになると思う。「生きていること」を当たり前だとは思ってはいけない。「生かされている」と思わなければならないと思った。最後に、「生きること」が難しかったあの時代を、生き抜いてくれた祖父祖母に感謝を伝えたい。

■伝えるありがとう■

誰かに言われて、伝えられて、嬉しいことばは何かなと考えたときに、私の頭の中に一番に浮かんだのは「ありがとう」ということばでした。「ありがとう」ということばは、不思議なパワーをもっています。相手から言われると、誰しも少なからず嬉しくなり、相手に言うと、少なからずその相手を喜ばせることができます。「ありがとう」と言われて、嫌な気持ちになる人は、おそらくいないと思います。そうした意味で「ありがとう」ということばは、とてもプラスなことばです。「ありがとう」と伝える人、また「ありがとう」と伝えられる人になるには、感謝の気持ちを忘れず、相手に対して思いやりを持つことが必要だと思います。

最近、私は『大切なことに気づく24の物語』という本を読みました。そこにはこう書いてありました。

「人生で当たり前のことなんて、何一つない。たとえば仕事に行けること、子供が無事に学校から帰ってくる。すべてが人生の一大事。」

この本を読んだときに思ったことがあります。それは、私が何不自由なく生活できているのは、いろいろな人に支えられているからだということです。家族だったり、友達だったり、自分のまわりにいるのが「当たり前」だと思ってしまいがちですが、それは違うんだなってことを改めて思い知らされました。「当たり前」のことなんて、どこにもないのだから、日頃から「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えることを忘れないようにしなくてはいけないなと思いました。

「ありがとう」ということばは、私たちにとって身近すぎて、言ったり、言われたりするものが当たり前になっていることばかもしれません。しかし、自分から相手に感謝の気持ちをストレートに伝えるとき、これ以上のことばはないと私は思います。普段、さほど意識もせずに使っていることばかもしれませんが、その時、その時、心を込めた「ありがとう」を伝える人に私はなりたいです。

■伝える難しさ■

「虹は何色でしょうか」と問われて、あなたはへと回答するだろうか。大抵の人が「七色」と答えると思う。しかし、それは日本人に限ったことだそう。他の国の人が同じ虹を見たとしても、必ずしも七色とは答えない。そんな馬鹿など、言われるかもしれない。しかし、本当である。なぜ、違いが出てくるのだろうか。それは、色の捕らえ方に違いがあるからだ。

日本の伝統色を考えてほしい。「紫」と称されている色も、古代紫、京紫、若紫、紅紫、梅紫、浅紫といったように、何色にも区別されているのだ。雪が多く振る土地では、雪の名称にもさまざまなものがある。それと同じように、色に敏感な地域や文化圏では、色をより細かく繊細に捉えるのだ。

自分が他人に何かを伝えようとして、あるメッセージを送ったとする。それは直接、言葉で伝えたものかもしれない。手紙やメール、あるいは、表情であるかもしれない。何でもよい。自分の「思い」を、ある「形」にして、相手に届ける。しかし、それは時として、相手方に誤った形で伝わってしまうことがある。こちらが友好的なメッセージを送った（送ったつもり）はずであるのに、怒らせてしまうことさえある。「思い」を「形」にしたつもりであるのに、その「形」が別の「思い」となって、相手に解釈されてしまうのである。それはなぜなのだろうか。

自分の思いをそっくりそのまま、完璧に相手に理解させることができない。それはきっと、物事の捉え方に「違い」があるからではないだろうか。たとえ、どんなに「完璧」な「形」を作り出そうとも、相手方の前提条件がこちらと違えば、その「形」から「思い」を正確に読み取ることができないのは、当たり前だろう。先に挙げた色の捉え方と同様に、宗教観や家族観、価値観が、それぞれが育ってきた生活環境、文化圏の特色などによって、違って来るからだ。違いがあることは仕方のないことなのだ。では、私たちはどうすればよいのだろうか。「形」はどうであれ、同じ「思い」であると信じること。そして、「思い」をより理解し易い「形」にする努力をすること。これらのことが、重要になのではないかと私は思う。

■伝えたい言葉■

私は両親に「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えたい。生まれたときから体が弱く、最初は保育器に入っていたそう。両親はさぞ心配しただろう。小学校に入る前の年、私は体を鍛えるために剣道を始めた。練習は土日の夜遅くまでなので、その度に送り迎えをしてもらった。中学生のときは、部活の朝練習があったので、遅れないように起こしてもらい、高校生のときは、早起きして毎日弁当を作ってくれた。そして今は大学に行かせてもらっている。思いつくだけでもたくさんの苦勞をかけている。だから、両親に感謝の気持ちを伝えなければならないと思っていた。でもそのきっかけがつかめないうちに。

チャンスが訪れたのは高校の卒業式の朝である。玄関を出る前に「ありがとう」と言おうと決めた。しかしその光景を想像すると、まるで感動もののドラマのワンシーンを再現しようとしているようで、急に馬鹿らしくなって言えなかった。そして再びチャンスが訪れたのは大学が決まり、東京へ引っ越すときである。このときも、恥ずかしくなって言い出せなかった。今度はいつ「ありがとう」という機会があるだろうか・・・そんなふうに思っていた。

自分の性格上、素直に「ありがとう」といえない。けれども、日常生活の中で注意することはできる。ほんの些細なことだけでも、実家に帰ったときに心がけていることがある。それは、食事の前と後のあいさつをきちんとすることである。まずは命をいただきますという意味でのあいさつ。もう一つは、食事を用意してくれた母と働いて給料をもらってきてくれた父に「ありがとう」という意味でのあいさつである。今の自分にはこれくらいのことしかできない。「ありがとう」、「ごめんなさい」を素直に言えるのが一人前の大人だ。そういう意味で、自分はまだまだ子どもだ。将来は、素直に「ありがとう」といえる人になりたい。

■伝える気持ち■

まず、“伝える”ということについて考えました。私が最近思ったことは、“伝える”という言葉は、二つの面を持つということです。

一つは、自分の気持ちを他人に解ってもらおうという意味での“伝える”です。私たちは他人に何かを伝えるときに、どのような手段をとるのか、具体的に挙げてみました。話す・手紙（メール）を書く・歌う（詩など）・作品を作る（絵やオブジェや音楽など）このようによく考えてみると、私たちには沢山の“伝える”手段があります。中でも、言葉を話すという方法は、最もよく使われる方法だと思います。話すということは、単純に何かを相手に伝えるということに言い換えられると思います。しかし、近年この単純な動作を苦手とするだとする人が増えてきているようです。彼らの中には、うまく伝えられないから、伝えることをしない。そして、伝えることを諦めてしまう人もいます。私は、自分の気持ちを伝えるということは、生きていくうえで大変重要なことだと考えています。うまく伝わらないときもあるけれど、最後まで“伝える”ということを、諦めてはいけないと思うからです。その結果、今回のテーマ「伝える〇〇」の〇の中に、‘気持ち’という言葉が適切だと思い、題名を「伝える気持ち」にしました。

二つ目は、伝えることが苦手な人の気持ちを引き出すということです。伝えることができる人は、伝えることが苦手な人の気持ちを引き出せるという意味です。相手の言いたいことを引き出してあげる。そして、伝えたい気持ちを言葉として導きだす。

私にとって、自分の気持ちや思っていることを伝えることは簡単なことです。自分に言いたいことだけを言って、他の人の気持ちを聞かない、知ろうとしないのではなく、相手の言葉に耳を傾け、ときには話を引き出し、相手の“伝える”言葉を受け取る。そんなことが、自然にできるようになったら、いいなと思いました。それは、“伝える”ことが得意でない人にとって、手を（言葉を？）差し伸べてあげるということでもあると、私は思います。また、“伝える”という動

作は、学生であっても、社会人であっても、親になっても、生きていくうえで、欠かせないものだと思うので、これからも、“伝える”ことを諦めないで、次のステップとして、引き出すという面での“伝える”というスキルを磨き、“伝える気持ち”を大切にしていきたいです。

■何かを伝えるために必要なこと■

私が誰かに「伝える」、ということをしているか考えてみたとき、真っ先に浮かんだのが私は所属するサークルで後輩に技術を「伝えている」ということでした。それがなかなか難しいもので、自分では簡単に理解できていることもまったくの初心者の後輩には受け入れにくいように教える側、伝える側はとても苦労しています。伝えたいことが相手に伝わらない時、自分の技術不足を痛感し、とても悔しい思いをします。来年度から更に上の役職として教える技術が求められる中で、相手にちゃんと伝えるために何が必要かを考え直す必要が生まれてきました。そこで去年まったくの初心者だった自分がどのようにして先輩から技術を教わったかと振り返ったとき、先輩は常に私のそばにいて遊んだり、真剣な話をしたりして、まず私の事を深く理解してくれたことを思い出しました。その上で私の言動や行動で何を知りたいのかを分析し、的確に伝えるべきことを伝えてくれました。それこそが人に何かを「伝える」ときに必要なことなのではないだろうかと思いました。相手を知ること、相手を理解して何を望んでいるのかを把握すること、それでこそ良い情報伝達出来るのではないのでしょうか。また、「伝えたい」という熱い気持ちも大切ですが、受け手の「伝わりたい」という気持ちが存在しなくては何の意味も持たないと思います。

■伝える技術の発展■

ネットサーフィンをしない日があるだろうか。思いつくのはテントで生活しているときぐらいで、日常ではほぼ毎日、私はなんらかの情報を求めてインターネットにアクセスしている。90年代前半までの、ネット環境が整備されていなかった時代では、欲しい情報にたどり着くまでには手間がかかった。しかし、現在ではインターネットの普及により、簡単に、お金もかからず、欲しい情報が得られる。関連書籍や雑誌の検索も楽に行えるので、インターネットと書籍の合わせ技で関心のある事柄を調べることは非常に心を躍らせる。インターネットで情報が安価に、手軽に手に入るため、出版物が売れなくなるという懸念が業界ではかつてあったそうだが、結果はまったく逆で、出版部数は増加の一途をたどっているようだ。インターネットが調べものの導入として非常によく機能しているためであろう。言い換えれば、全ての情報をインターネットでまかないきれないという、ほどよい不都合さのお蔭であろう。

世界中で情報を共有できるというのは凄い。凄いという言葉を使うとなんだか安っぽく感じてしまうが、ぞっとするぐらい並はずれていることだ。どれぐらい並外れているかを示す分かりや

すい良い例があるので紹介しよう。

スピードキューブという遊びをご存知だろうか。ルービックキューブという、80年代に流行った、 $3 \times 3 \times 3$ のブロックで構成された立方体パズルを、超高速で完成させるという競技である。ルービックキューブでそのようなカルト的遊び方をする者は各国に数人程度しか存在しなかったとのことだが、インターネットの普及により、パズルの解法が万人に知れ渡ることとなり、21世紀になって再びブレイク。新たなキュービストを生み出すこととなったらしい。さらに解法は増え続け、最速タイムが年々更新されているとのことだ。いささかおちゃらけた例であるが、学術分野の発展の例も似たようなものなので、情報伝達技術発展の威力はこの例が表しているだろう。

世界中のありとあらゆる分野のマスターピースに触れられる環境にあることを幸せに思う。
いい時代の、いい環境に生まれてきたな。非常に恵まれている。
